

「権力の空間/空間の権力」 個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ 山本理顕 著



■住宅は私的空間である。その外側はインフラという網目（都市空間）である。その網目は公権力によってつくられる。

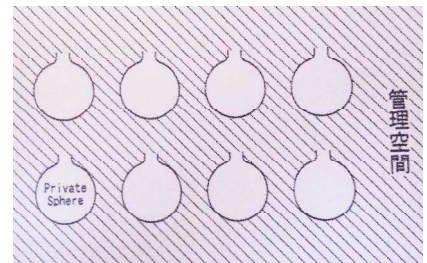
20世紀、過去の様式とその周辺環境から解放された建築によって社会は徹底的に均一化される。それがいかに決定的な過ちであったか、それを厳しく批判したのは、ハンナ・アーレント（1906-1975）である。

本書でハンナ・アーレント著書「人間の条件」「革命について」などをテキストに、古代ギリシア都市や集落を例にした「闕」しきいという空間を示しながら、山本理顕氏が「地域社会圏」を提案しています。

今私たちが住んでいる家はその外側とは切り離されて、単に家族の私生活の場所でしかなくなってしまっている……。 (下記は本書の小項目など抜粋)



- 1住宅=1家族はコミュニティをつくらない
- 四つの壁に囲まれて幸福になる人びと
- 住宅は27年で取り壊される
- 住宅は消費財である。それが国家政策である
- 国民を標準化するための住宅政策
- 規格化された住宅の大量供給は地域性を排除する
- 私生活の自由はあっても政治に参加する自由はない



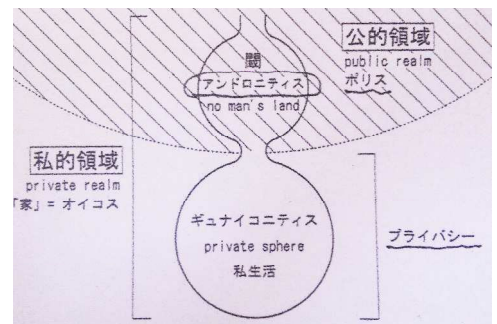
1住宅=1家族システム



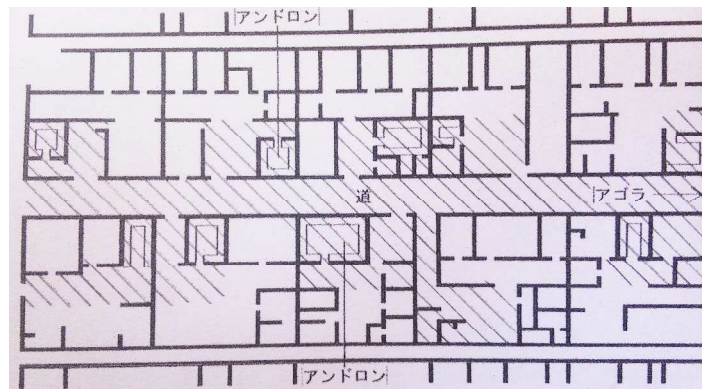
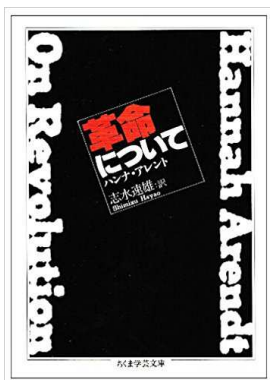
- そもそも居住専用空間などなかった
- 中世都市の街なみはブティックによってつくられていた
- 搾取されているのは卓越した仕事をしたいという意志である



- 闕（しきい）は結びつけると同時に分け隔てる
- 職住一体へ
- 住民と共に設計せよ
- レゴのような建築を提案した
- 生に輝きを与えるのは空間への意志である



闕（しきい）=家の中の公的空間



闕は道につながり、道は広場（アゴラ）につながる